Report2　西宮で広げる、地域で助け合う子育ての輪

言葉をつむぐことで生まれた力

坂本 恭子（a little）
原 康子（ムラのミライ 研修事業チーフ）

2019年6月に開催した活動報告会。 パートナー団体a little（ア・リトル）の坂本恭子さんに「この1年間、ムラのミライと活動してどうでしたか？」というお話を、「どう？」を使わないで聞いてみました。1年間のコラボレーションは、どんなことを生み出したでしょうか。

ムラのミライの、ある時/ない時～わたしにとって

康子：関西在住歴わずか3年の私は知らなかったのですが、関西では有名な「５５１の豚まんのある時、ない時」というCMがあるのですよね。まず「ムラのミライのある時、ない時」を聞いてみたいと思います。

恭子：ずっと関西にいると「みんな知ってて当たり前」と思っていたCMですが、そうではないんですよね。ムラのミライのある時、ない時、どうぞ聞いてください。

康子：西宮プロジェクト１年目を終えて、恭子さんが、プロジェクト開始前はやっていなかったけど、現在はやっていることがありますか？

恭子：そうですね、プロジェクトが始まる前は、出会う、学ぶ、実際にサポートして誰かを支える、といった活動をこなすことに必死で、1年後、3年後、数年後のビジョンを描くことは出来ていませんでした。次々と現れる目の前の課題に、自分や仲間の柔軟性や臨機応変な対応力のみで取り組んでいたと思います。

そうした活動を報告書などで振り返ったりしませんでしたし、ア・リトル以外の誰かにつなぐことができていなくて、その場の対応になってしまっていました。でもムラのミライと１年間一緒に活動をしてみて、私自身がア・リトルの理念のこと、活動のこと、プロジェクトのことなどを、自分の言葉で話す力がついてきました。それまでは、実は創立メンバーの他の２人の言葉を借りて話しているだけだったのです。

先日、プロジェクト開始直後の昨年4月頃のミーティング記録を見直したのですが、私、まったくミーティングで発言していなかったんです。当時は、このプロジェクトでなにが始まるのか、子育てをめぐる社会の課題など、すべてが漠然としていました。ところが、毎月のミーティングの度に、ムラのミライの康子さんと美翔さん（プロジェクト担当の原康子と山岡美翔）に何度も質問されることで、だんだん自分の言葉を身につけてきたと思います。昨年は小学校のPTA会長という大役もやることになったのですが、自分の言葉で話すことは、そんな地域の活動でも活かせました。

また、プロジェクトを通じて事実質問で聞く場数が増えてきたことで、子どもとの対話が変わってきました。思春期真っ只中の娘がいるのですが、彼女の話を聞けるようになってきました。以前は彼女によかれと思って、あれもこれも伝えたいというのが先走っていたのですが、今はまず彼女が話すことを待てるようになってきました。

ムラのミライの、ある時/ない時～ア・リトルにとって

康子：ではア・リトルとして、プロジェクト開始前にはやっていなかったけど、現在はやっているようなことはありますか？

坂本恭子さん
大阪市出身で、西宮市在住歴18年。
PTA会長を務め、友人の市議会議員挑戦を応援する中で、地域の課題や同年代女性の抱える課題を言語化するような集まりの場をたくさん開催しています。

恭子：できるようになったことはいっぱいあります。例えばジョンソン・エンド・ジョンソン日本法人グループの助成金を得たことで、報告書、会計処理を毎月きちんとできるようになりました。それに、調査で得られたデータを使って、行政や専門家に、実情や課題を伝えられるようになってきましたし。

あとは「なんとなく同じ気持ちで活動しているんだろうなあ」というのではなく、きちんと各自の言葉でア・リトルの活動理念を共有することもできるようになりました。ムラのミライの2人と月に1回は顔を合わせ、ミーティングをすることで、自然と2人が使う事実質問やメタファシリテーションの恩恵を受けたように思います。

この2人にはよく褒めてもらえるのですが、褒められることで、ア・リトルのメンバーが自信を持って活動することができるようになりました。プロジェクトで忙しくなっているにも関わらず、運営メンバー全員が、子育て支援以外の分野での発信力もつけているように思います。

ア・リトルの子育て支援は活動の一部

康子：私たちも月1度のミーティングに参加する度、ア・リトルの皆さんにエネルギーをもらっていたことを思い出してきました。逆に、プロジェクトが始まってしまったから出来なくなってしまったこともあるのではないですか？

恭子：はい、あります。今までア・リトルでは「つどい場」という単発の集まりを頻繁にやっていたのですが、その回数は減りましたね。特に「子育て支援」に特化している団体ではなかったのですが、今は「子育て支援」の側面が強くなってきていますね。

康子：もともと「子育て支援」は主な活動ではなかったということですか？

恭子：そうなのです。ア・リトルは「女性の自立ってどういうことか？」「女性の自立のためにどんなことができるか？」と考えて活動してきたので、子育て支援というのは女性の自立をサポートするひとつの分野であって、ア・リトルの活動すべてが子育て支援というわけではないのですよ。

ムラのミライの担当スタッフはナニをしてた？

康子：西宮プロジェクトもア・リトルの様々な活動の一部ですものね。先ほど私と山岡が事実質問を投げかけてくれた、月1度のミーティングに参加していた、何かと褒めてくれた、と言ってくださいましたが、他に私たち2人がやったことはありますか？

恭子：西宮プロジェクトは3年間のプロジェクトなのですが、いつも1年後、3年後のビジョンを持ち、どこを目指しているのかを問いかけてくれたり、思い出させてくれたりしました。2018年度、私たちは、一つひとつの講座をこなすことに手いっぱいになりがちだったのですが、2019年4月に1年の振り返りミーティングをした時ビックリしたのは、きちんと1年前に思い描いていたプランどおりにプロジェクトが進んでいたのです！これは、ムラのミライの2人がいつも全体を見てくれていたおかげだと思います。…なんか私、ちょっと2人を褒めすぎてますかね？

康子：はい、ホント褒めすぎです。対談ということで、かなり盛って話しているんじゃないか…と照れながら聞いています。よいことばかり聞いてしまいましたが、ムラのミライと活動していて「ちょっとよく分からないなあ」「なんでこんな事しなくちゃいけないの？」「しんどいなあ」という時もあったかと思うのですが、それはどんな時でしたか？

西宮で広げる、地域で助け合う子育ての輪プロジェクト

どこで 兵庫県西宮市
だれと 産前産後の女性（パートナーも含む）とその支援者
活動のパートナー a little（ア・リトル） ※西宮市のNPO
支援パートナー ジョンソン・エンド・ジョンソン日本法人グループ「2018年度助成プログラム」
なにを 女性の自立を支援するグループa littleと一緒に、子育て中の人たちが中心となり、助け助けられる社会の実現をめざします。西宮市で産前・産後を迎える女性（そのパートナーも含む）と、彼女（彼）たちへの支援を希望する人たちを対象に、調査や講座を3年間かけて実施し、地域で助け合う子育ての仕組みづくりをおこないます。ムラのミライは、a littleを中心に子育て中の人たちがその力を最大限活かせるよう、持っている力を引き出しながら、メタファシリテーション手法を用いて支援しています。

負荷のかかるコラボーレション

恭子：はい、確かにそういう時はありましたね。「いつ」というより「いつも」だったかもしれません（笑）

康子：えっ…ということは「しんどいなあ、なんでそんなにア・リトルにばっかり仕事を押しつけてくるの、勘弁してよ～」と思っていたということですか？

恭子：はい（笑）ムラのミライだけでなくア・リトルの活動もそうなのですが、常に私の能力より少し高めの仕事を求められているようで、やや負荷をかけられているような状態なのです。ですから、結構もがきながら活動しています。ただ時間が経つと、いつの間にか少し力や自信を付けた自分に気づいて、また新しい負荷を背負えるようになってきています。

康子：なるほど。最近は恭子さんに「康子さん、あれお願い、これお願い」と、負荷をかけられているような気もしますが…

恭子：そうなんです。今まで何もかも抱え込むタイプだったのですが、だんだん手放すことを学びましたね。これもムラのミライあるとき効果かもしれません。また、自分の対話技術があがったり、「助けて」と言えない社会構造に気づく中で、相談を受けたり、人が抱えるしんどさに気づくことが増えてきました。今でも、自分のできることとできないことの線引きが難しく、多くを抱えてしまうことがあります。

プロジェクト参加者からの声

康子：1年間で調査、地域子育てサポーター養成講座、産前産後のご家族向けパートナーシップ講座という活動をしました。参加者のコメントにはどんなものがありましたか？

恭子：担当した地域子育てサポーター養成講座の参加者からは、8回連続受講することで、自分の産前産後をふりかえったり、今の自分のしんどさとつながって、参加してよかったという感想をいくつも頂きました。参加者にとって「自分もしんどいと言っていい」と言える講座になったと思います。調査では私も何人かにインタビューをしたのですが、全員が産後に不安を感じていたとわかりました。なのに「助けて」と言えない状況が調査全体を通じてわかってきました。

康子：「ああ～これは失敗だったな」という出来事はありますか？

恭子：それはないです。でも、産前の方に講座に関心を持って頂くことがなかなか難しくて、産前の方を対象にした講座の参加者募集に毎回苦労しています。

「なんでムラのミライと一緒に活動するの？」と言われたとき

康子：ア・リトルに比べて西宮でかなり無名なムラのミライですが、「なぜムラのミライと一緒にプロジェクトやってるの？」「ムラのミライってどんな団体？」と聞かれたことはありますか？

恭子：はい、何度もありますよ。そんなときは「ムラのミライは、途上国で支援を続けてきた実績のあるNPOです。建物や金を渡すような支援ではなく、対話によって当事者自らが課題に気づき、解決方法を考えるメタファシリテーションという手法を使って支援している団体ですよ」と答えています。「なんで一緒に活動しているの？」と聞かれたら、次のように答えています。「ア・リトルは、メタファシリテーション手法を学び、活動で関わる人とのコミュニケーションに役立てています。西宮プロジェクトは、ムラのミライが日本社会の孤立した子育てに気づき、その課題に向き合うパートナーとしてア・リトルを選んでくれたのです。途上国で支援したように、ア・リトルに関わる私たちが自分たちの活動の課題に気づき、持続性のあるものになるよう、私たちを育てる役割を担ってくれています」

康子：ア・リトルあっての西宮プロジェクトです。ムラのミライだけでは孤立した子育ての課題の現場に入っていき、それを変えてゆく活動に関わるなんて絶対できなかったと思います。私たちの方こそ、ア・リトルの活動に関わらせてもらうことができて、本当にありがたいことだと思っています。